



第6回

文化と芸術に触れ合える

このまちで心豊かに成長を

ピカピカの子どもの未来が育つまち宗像市。今回は、宗像ユリックスで4月2日から同21日に開催された宗像ゆかりの画家・中村研一特別展「大きなクスの木の下で」と、創造体験プログラム「木のねんどを使つて」を取材しました。

■問い合わせ先
文化・スポーツ推進課

☎(36) 1540

絵画の世界に触れ合いながら 大きなクスの木の下で

宗像市出身で、東京都小金井市に永住した日本洋画界の重鎮と称された中村研一。宗像ユリックス美術ギャラリーで、中村研一特別展「大きなクスの木の下で」が開催されました。この企画は昨



中村研一自画像に見入る小島さん親子

年、市と「文化交流の連携・協力に関する協定」を締結した小金井市の「中村研一記念小金井市立はげの森美術館」から油彩や水彩、陶器などを借りて実現しました。展示する絵画の選定

は、市民がつくる美術展となりました。子どもたちが本物の芸術作品に触れる機会にと、展示位置を子どもの目線に合わせて低めに設定。また、展示品の説明にはふりがなを振りしました。特別展を見に来ている南郷小6年の小島みりさんは「油彩・錦旗(きんぎ)は、南郷小学校の玄関に飾ってあったので、とても親しみがありません。いつも見ていた絵が、こうして展示されると改めてすごい絵なんだと感ずることができました」と話してくれました。



作品を子どもの目線の高さに展示された館内

写真的顔と絵がそっくりで、本物みたいでした」と目を輝かせていました。知夏さんは、昨年度、市内小学生を対象に募集した「中村研一特別展開催記念企画」むなかたこども絵

なつた生家には、兄弟の幼少期のスケッチブック、日記帳、家人との書簡、「祖母トミ」像など、生家ならではの多くの収蔵品もあります。

えがお満開の子どもたち 木のねんど細工にチャレンジ

中村研一特別展に併せて、子どもたちに、自らつくり表現する体験をという思いから、週末にはさまざまな講師を招いて全6回の創造体験プログラムを実施。4月13日には、クスの木スタッフが講師を務めた「木のねんどを使つて」が開かれました。

まずスタッフの下田弘紀(ひろみち)さんから木のねんどについて説明。参加した親子は真剣な面持ちで話を聞いていました。下田さんの「では作りましょう!」の合図と同時に、子どもたちの目の色が一斉に変わりました。赤や緑や黄色などカラフルな木のねんどを思い思いにこね始めました。おがくずでできた木のねんどは、とても柔らかく、手にも馴染みやすく、子どもたちの小さな手の中で、さまざまな形に生まれ変わりました。赤間小3年の小手川颯



颯馬くんの力作「4匹の生き物」



お母さんの喜ぶ顔を想像して作る荘真くん(右端)



真剣に作る結唯ちゃん(中央)と妹の紗代ちゃん(右端)

参加したくなる紙面づくりを心がけた。(ひ) ■自由ヶ丘中学1年生の古上風太さんが名付け親の「いせきんぐ宗像」。大人にも親しみやすい良い名称です ■10周年を迎えた新市に、また新たな名所の誕生はうれしい限り ■これを機に、市内に花や緑の公園がもつとたくさん増えてほしい。プレオープンが楽しみです。(み)

馬(そうま)くんは、4匹の生き物を丁寧に作りました。「この4匹は、僕の大切な宝物にします。部屋に飾るのが楽しみです」と力作を前に、とても満足気に話してくれました。東郷小4年の野田荘真くんは、家族全員へのプレゼントにと、4人分の箸置きを作っていました。荘真くんのお父さんは「今日は子どもたちの発想力の豊かさを感じることができました。宗像には文化や芸術、音楽などがあり、子育てするに」と話してくれました。スタッフの下田弘紀は「このような体験教室に親子で参加したのは初めてです。子どもたちが、いろいろと作っている姿を見ると、それぞれに性格が出ていて、親としても楽しむことができました」と二人の作品を見ながら笑顔で話してくれました。

「好きな言葉は?」と聞かれたら「二期一会」と即答。語源は「茶会に臨む際は、その機会を一生に一度のものとして心掛けて、誠意を尽くす」という茶会の心得 ■取材でたくさんの人と出会う機会が増えました。広報紙を通して「知ってもらえる」「使ってもらえる」ことが取材のやりがい ■取材担当ピカピカの一年生。初心を忘れず頑張ります。(な)

舞台裏